



Title	津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究 : Hobby Horse Dance
Author(s)	沼倉, 学
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16690号
Issue Date	2025-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16690
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98664
Type	doctoral thesis
File Information	NUMAKURA_Manabu_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：沼倉 学

学位論文題名

津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究

—Hobby Horse Dance—

本研究は津軽の民俗芸能「荒馬」について歴史的民俗学的考察を行い、「荒馬とは何か」という本質的な問いを明らかにすることを目的とする。

「荒馬（あらま・あらうま）」は青森県津軽地方を代表する民俗芸能のひとつで、『民俗芸能辞典』によれば、荒馬は青森県、秋田県、岩手県に伝わる駒踊の一種として、その基本的芸能を「木製の馬の首の作り物と尻毛尾のついた楕円形の竹の枠型の作り駒を腰にくくりつけ、あたかも人が馬に乗っているように身づくろいをして踊る、いわゆるホニホロ式の騎乗擬態の風流踊」と説明されている。このような風流踊としての荒馬は津軽地方に広く分布し、その地域に伝わるボウノカミ送り、虫送り、ねぶた祭りなどの年中行事や祭りの中で伝承されてきたが、地域によってその基盤となる年中行事や祭り、そこで踊られる踊りの様式が異なる。

同時に、津軽の荒馬は世界的視野からも捉え直す必要がある。津軽の荒馬には上記に述べた地域独自の固有性も伴うが、世界的には「Hobby Horse Dance」の一形態に過ぎず、荒馬のように動物を真似た装束、所作、踊り、馬を模倣する木馬を道具立てとする文化は津軽のみに限定されるものではなく、ユーラシア、ヨーロッパに共通する文化として存在している。このHobby Horse Danceと総称される舞踊は、人間と馬との共生関係に遡ると考えられている。しかしながら、これまで、国内外を問わず、津軽の荒馬を世界に伝わるHobby Horse Danceの一つとして探究する試みは皆無であった。

荒馬は踊り継がれてきた舞踊であるため、文字資料としての蒐集の困難さを伴い、研究史上における空白も存在し、上述の世界史的観点も欠如していた。それにもかかわらず、

荒馬の保健体育教材としての価値は高く、津軽地方の郷土文化の伝授を目的とした活用にとどまらず、広く知られている。それゆえ、本稿が目的とする「荒馬とは何か」という本質的な問いは単なる民俗学的歴史学的貢献を為すだけでなく、保健体育科の授業教材として、全国的に活用されてきた「荒馬」流儀の文化的奥行きを検証することに等しい。

本論文は第一部と第二部から成る。第一部「津軽の荒馬についての歴史的民俗学的考察」では、江戸期の日記・紀行文に書き残されていた史料の分析を行った。その上で、現在伝承されている荒馬の圏域毎の比較検討を行い、各地域に定着した荒馬の文化的特徴を検証した。具体的には、第一章「江戸期の日記・紀行文にみる荒馬の起源について」の中で、虫送りやボウノカミ送りの行事は 1600 年代までは虫害や疫病が流行した時に村々で行われ、1700 年中頃になると灯籠を掲げ鉦を鳴らしながら風流行列をする形態が見られるようになったことを示した。1700 年末頃には風流行列を楽しむ娯楽的要素が加わり、1800 年代中期の弘前周辺の地域では、行列の趣向を隣の町や村と競い合うようになり、その中で荒馬が誕生し取り入れられたことについて論じた。

第二章「津軽の荒馬の比較研究」では、荒馬の分布と地域毎の芸態の特徴からその圏域を措定し、その代表例となる荒馬の比較検討から荒馬の類型化を図り、その特徴を示した。これにより、作り駒の形状や、その中に体を入れて馬の様に踊ることが、全ての圏域に共通する様式であることが明らかになった。また、南津軽地方の荒馬は手綱取りがない馬役が独立した芸態で、駒踊との関連が深く、北津軽地方の荒馬は虫送りの中で 1 人の馬役と 2 人の手綱取り役の 3 人組で踊られ、即興的に馬の姿を表現して踊るのが特徴であった。上磯地方の荒馬はねぶた祭りの中で踊られ、男性の馬役と女性の手綱取り役がペアを組み、いくつかの動作を組み合わせたひと踊りがあるのが特徴であった。加えて、以上の圏域としての特徴は保持されるものの、祭り全体の下位体系の流儀を含めて捉えると、津軽の荒馬は可変的かつ流動的な文化的総体としての伝統芸能であったことが明らかになった。

第二部「Hobby Horse Dance としての荒馬」では第一部で述べた日本の津軽における風流踊である荒馬の文化的特徴を相対化し、世界的な Hobby Horse Dance との共通性と独自性を明らかにした。具体的には、第三章「前近代のスポーツ概念にみる Hobby Horse Dance」において、Hobby Horse の概念が前近代的なスポーツ概念とかかわりがあることについて論じた。その底流には、人間が動物を操作したり、征服しようとしたりする関係性よりも、動物の模倣を通じた動物と人間との融合・混在性の表象や自然との共生意識

が存在するものであったことが明らかになった。さらに、Hobby Horse Dance が踊られる五月祭や各地域に伝わるお祭りは、王と臣下、男と女、人と動物など日常の権威や正常とされる社会的地位が逆転する「さかさまの世界」を特徴とし、こうした「さかさまの世界」は津軽の荒馬にも共通するものであったことについて論じた。

第四章「荒馬に見る日本馬と人の共生関係」では、第三章で得た世界的な Hobby Horse Dance 視座をさらに深め、津軽の荒馬にみる日本人と馬との共生関係について考察し、その独自性に論じた。日本人と馬との関係は牧における日本独自の生産方法で主流でもあった「野馬（のま）飼い」に特徴的に表れている。また、日本では去勢せず、蹄鉄を打たずに、自然の野馬の野性＝荒々しさを残したまま、共存を図るという特徴があったことが明らかになった。さらに、牡馬は軍馬となり、庶民が生活の中で牝馬を駄馬や農耕馬として用い、ときには 1 人で数頭の駄馬も引かれた。こうした日本独自の馬産の在り方、人々と牡馬や牝馬との関係性が荒々しい牡馬＝荒馬として表現されたと考えられる。

以上により、第一部で論じた荒馬は津軽という日本の地域における固有の風流踊であると同時に、世界に広がる人と馬との共生関係の表象としての Hobby Horse Dance の一形態であることの具体的様相が明らかになった。結語では、第二章で論じた通り、津軽の荒馬の起源は特定できるものではなく、圏域としての共通項と多様な下位体系から成ること、ルーツ以上に重要なことは、第三章で論じた通り、Hobby Horse Dancing としての共通性と第四章で論じた日本独自の馬産の在り方、自然との共生関係を理解することにあると論じた。

なお、これらの探究成果は、そもそも学校体育教材として踊られていた教材として荒馬に新たな視点をもたらすことから、「補論 Hobby Horse Dance としての荒馬の教材化の試み」として以下のことを論じた。まず、荒馬とは可変的かつ流動的な文化的総体に他ならないことから、「Hobby Horse Dance としての荒馬の教材」では、複数の踊りの発展的な継承に基づくことを学習目的とした。単騎の荒馬踊り、手綱取りがついた荒馬の即興踊り、ペアでの振付がある荒馬踊りへと発展しながら踊る学習過程は荒馬の発展史の追体験につながる。また、牡馬か牝馬かといった荒馬の雌雄の別と踊りとの関係性、日本人と馬との共生関係について思考を及ぼす教材になるよう配慮した。本教材は歴史的文化的背景の理解を促すため、小学校高学年から中学 1 年次を想定した。授業研究としての検証は今後の研究に委ねたい。